

小平図書館友の会 会報 30号



発行日 2013年5月14日
発行者 小平図書館友の会会長 剣持 香世
H P <http://www4.plala.or.jp/Nori/>
ブログ <http://yamaoji.cocolog-nifty.com/kitomonokai/>

New

目次

友の会 15周年によせて	… 1	◆ 私と読書	… 2~5	◆ おしらせ	… 5
特別企画 友の会 15年のあゆみ 略年表	… 6~7				
15回目の古本市を終えて	… 8	◆ 文学散歩	… 8		
学習会報告					
障がい者サービス学習会	… 9	声に出して本を読む会	… 9		
YAを楽しむ会	… 10	読書サークル・小平	… 10		
図書館について学ぶ会	… 10				
図書館協議会報告	… 10				

2013/3/29 第15回チャリティ古本市準備中の昼休み風景



友の会 15周年によせて

会長 剣持香世

小平図書館友の会が発足以来 15周年を迎えられたことは真に喜ばしいことです。会員の皆様はもとより歴代役員の皆様のひとかたならぬご尽力のお陰と御礼申し上げます。

昨今、読書離れが進んだり、書籍が電子化されたり、また情報を得る方法も多様化して図書館をめぐる状況は時代と共に変化しつつあります。しかし私たちの図書館はまだまだたくさんの可能性を秘めていると考えます。友の会はそうした図書館の未来をともに考え、充実に寄与することができるよう努力したいと思います。そしてなにより会員の皆様が入会してよかったと感じられるような魅力ある友の会でありたいと思います。

私と読書

会員寄稿

今回7人の会員の方に文章をお寄せいただきました。
本にまつわるそれぞれの方の思いをお届けします。

本に関する思い出

佐藤忠彦

子どもの頃、将来なりたい仕事は本屋さんでした。人口5千人ほどの町に本屋さんが2軒ありました。1軒は文房具屋も兼ね教科書の取次ぎもしており、町の議員をも勤めている名士でした。もう1軒は駅前であり、こちらは本屋専業で店舗はそれ程大きくはありませんでした。本好きな私は1軒の本屋で立ち読みし、残りの部分を他の本屋さんで店員さんを気にしながら立ち読みしたものでした。本屋さんになったら存分に立ち読みが出来ると考えたものです。今でも閑があると本屋へ行って立ち読みをするのが好きです。

父は無尽会社(北日本相互銀行)に勤めており、週刊サンケイを購読しておりました。私は連載されていた今東光の「悪名」を読むのが密かな楽しみでした。中学生時分の私にとって刺激的な内容だったと記憶しています。リーダーズダイジェストという雑誌も定期購読しておりましたが内容は今は全く覚えておりません。その頃読んだ本でただ一冊記憶している書名がありました。「悲田院」という養老院の生活の有様を描いた小説で、養老院での男女の恋愛葛藤が生々しく描かれておりました。どうしてこの本が家にあったのか不思議です。近年、小平中央図書館で捜しましたら書庫の中に有りました。読んでみましたが子どもの頃の感動は全くありませんでした。「悪名」を今読んだらどんな感想が得られるのか楽しみです。



絵本の効用

大槻千秋

図書館友の会の会員ですと言うのが恥ずかしいほど、読書から遠ざかっている私。読む活字という点では保育や行政に関する資料を通勤電車の中で読んでいますが、今読んでいる本と言えば、毎日「園長先生、絵本を読んでください」と保育園の事務室にやってくる5歳半のあみちゃんに読んでいる絵本くらいのものでした。でも、小さい子どもにとっての絵本の効用をお知らせする良い機会かも。



保育園では、以前はそうでなかったのに、何でもないことですぐ泣いたり、お友達に意地悪したり、保育者の指示がなかなか通らなかったり、自分でできることでも大人に「やって」とせがんだりするようになった子に、絵本の読み聞かせを一对一で私が主任がしています。たかが絵本というなかれ。絵本の効用はすばらしく、早い子では1ヶ月くらいで効果が出てきます。つまり、気持ちが落ち着いて泣き虫さんでなくなり、しなくてもいいいたずらを止め、担任の言うことを素直に聞き入れるようになり、もとの良い状態に戻るのです。この読み聞かせは、担任と相談して必要な子に必要な期間読んでいますが、長い子でも半年くらいで必要がなくなります。絵本を読む時間は、お昼の給食が済んでパジャマに着替えてお昼寝に行く直前です。「これを読んで」と選んでくるのですが、主任と私で前もって読んであげたい本を選んで本棚に置いておきます。上のあみちゃんの場合は、下に弟くんが生まれてママが忙しく、十分に彼女に関わってもらえないことが不安定な原因かなあと思ったので、「ちょっとだけ」とか「はじめてのおつかい」のような絵本を「選んで」もらいました。読みはじめて4ヶ月近くになりますが、もう大丈夫そうです。年長組さんに進級するのを機会に、読み聞かせを卒業してもらいましょう。

「読書について」でなく、絵本の効用という文章になってしまいました。

私と読書・人間の運命

池田春寿

私と「人間の運命」との出会いを振りかえると、最初の「人間の運命」を読み、同名の映画を見てから50年余りが経ちました。2回目の出会いは8年ほど前の「銀河鉄道の夜」「人間失格」に続いて6年も続いた「人間の運命」中央大学公開文学講座でした。

振り返ってみると1960年安保の年に大学に入り、ソ研入部がきっかけで、ロシア関連の本を齧った時に、「静かなドン」「開かれた処女地」で知られるミハイル・ショーロホフの短編「人間の運命」とその映画ですっかりファンになってしまいました。現在図書館に所蔵されている本は2008年の再販本で、佐藤優「新解説」が後書で取り上げられ、「戦争と平和」よりロシア人の紹介にこの「人間の運命」を薦めると言っていることに驚きました。更に佐藤優がこの本を中学一年の時に読んだことに再々の驚き。

続いて超長編、最初から〈大河ドラマ〉として執筆したといわれる「人間の運命」芹沢光治良の作品でした。作者自身をモデルとした森次郎が明治の終わりから、大正、昭和の戦後まで激動の時代を、周到な準備の基で近代化を進める日本社会〉というとらえ方で、日本の社会の格差、宗教と思想、政治や文化、戦争の問題など、親と子、友情、愛と結婚の問題、など作者自身が経験したことの証言として主人公及び周囲の人々の生き方〜社会の発展の中に描きだした〜（一部完全版・人間の運命の刊行の辞・勝呂奏・より転載）。今年没後20周年記念として14冊版に追加校正を入れて全18巻「完全版・人間の運命」を出版販売中です。図書館には旧オリジナル版を所蔵しております。完全版を希望の方は私の所に9月には全18巻揃う予定です。

また、沼津市の記念館には膨大な資料があり、これらを見るには予め問い合わせが必要です。

今回この機会を頂いたことで、ショーロホフの「人間の運命」改版を手にする事が出来たことに感謝。

「あれ、知らないうちに・・・」

杉本順子

さて、そろそろ古本市に出す本をまとめなきゃ、と考えて本の塊に恐る恐る手をつける。「この本、好きだった。どこが好きだったかな」と読み始めるとたちまち時間が過ぎていき、そしてまた塊の一部に戻される。そんな断捨離作業が一向に捗らない中、ぱらぱらと本をめくるうち、私はある文章に目が止まってはっとした。「えっ！この人の文章だったの？」私はあるところに、その一文をあたかも自分の言葉であるように書いていた。内容もおぼろげなのに、そこだけ無意識のうちに頭の片隅に残っていたなんて・・・本を読むことは、食事の様なものかもしれない。必要なことばを選び、ぱくぱくと食べ、自分を作っていく。だから、背表紙から発せられる「今あなたに必要な栄養素はこれですよ」というオーラを簡単にキャッチできるのかも。

今年も！？断捨離にもれた一冊が角田光代著の『この本が、世界に存在することに』。本をめぐる9つの短編集で、主人公はそれぞれ、本を通して誰かと繋がっている。目の前の関係の深い人だったり、はたまた古本市の様に、人から人へと旅する本を偶然手にする見知らぬ誰かだったり・・・読書はきわめて個人的なことなのに、人との繋がりも生むという観点が面白い。

後書きには角田さんの本とのつきあいが交際履歴として載っていて、その中でまた私が自分の言葉としてしまいそうな印象的な文章はこの一文だ。「あんまりおもしろい本に出合ってしまうと、読みながら私はよく考える。もしこの本が世界に存在しなかったら、いったいどうしていただろう。世界はなんにも変っちゃいないだろうが、けれど、この本がなかったら、その本に出えなかったら、確実に、私の見る世界には一色足りないまんまだろう。」読書量の少ない私でも、本を閉じた後、そんな思いに浸ることが度々ある。



本のこと

今井美代子

地域子ども達に読書の楽しさを伝えたいと本の手渡しを始めて40年、今では市立図書館が充実し、文庫は子どもの本のあるスペースに変わった。

私が子どもだった戦中戦後は本どころかあらゆる物質の乏しい時代で、本屋さんの棚がからっぽだった。それでも本が読みたくて従妹から「少年少女文学全集」等を借りて読んだ。

満州に転勤になった父の知り合いが、我が家の二階に一家の荷物を預けていったが、その中に本の入った一箱を見つけた。「ファーブル昆虫記」や「日本文学全集」があった。「人さまの物を」と叱る母に隠れて二階の窓辺でそっと読ませてもらった。

ファーブルが描く虫達が、まるで人間のように知恵をしぼって生きるさまは、これまで読んだことのない世界だった。芥川龍之介の「くもの糸」、お釈迦様が極楽から下ろした蜘蛛の糸に縋り、地獄から脱出するかんだが己のみ助かろうと必死で叫ぶ。今思い出しても悲しい。心が痛む。その晩は眠れなかった。

原っぱで見つけた天道虫のこと、私もファーブルみたいに物語を書こうと胸を躍らせた。

さて戦後間もなく満州から引き揚げてきた一家は、半年程二階に住んでいた。男性のように髪を丸刈りにして帰国したお姉さんは岩波書店に勤め始めた。或る日「休刊していた雑誌の発売日、雑誌を買う人で幾重にも列ができた」と話しているのを聞いた。戦後の復興の兆しが少しずつ見えてきて、本屋さんにも粗末な文庫本や雑誌が並び始めた。すべてにハングリーだった少女期の私に、大きな瞳（中原淳一）の少女雑誌「ひまわり」や吉屋信子の小説が出回ったが心に響くものはなかった。



私と読書

菊地征夫

私に本を読む「癖」が付いたのは小学生の頃です。それは時代的な環境だと思っています。環境と云っても孟母三遷的な高尚なものではありません。私の子供時代は村にテレビがある家はありませんでした。

その頃は皆が等しく貧しかったですね。ただ、我が家には親父の岩波文庫の本が多くありました。それをせっせと読みました。他に娯楽がないですから。小学校3年くらいの頃からですからあの漢字を読めるわけがありません。それら漢字はふっ飛ばしたり、或いは我流に読んでいったのです。ですから漢字の読み方は相当に我流でよく大人に笑われたものです。

一方、学校には図書館がありました。私は自薦して図書委員（あの頃そのような名前だったかどうか）になりました。本は多いし、自由にいくらでも読めるし、図書館にいるときは楽しかったですね。私



（私達？）の読書のスタイルは私達の時代を反映しているのでしょうか。食事のスタイルと似ていますね。乱読、多読、速読です。この貧しい時代に育った者たちには読むことと食べることは同じく大切で同時にやってきたことだったのです。

私も会社に勤めて中堅になった頃、どういう訳か英語圏の駐在を命じられました。「英語とゴルフは上手くならないものだ」が私の信条でテレビを見たって良く分かる訳でもありません。どうしてもまた読書（日本語の）の方向にゆくのです。出張の飛行時間もこれ読書の時間でありました。このことは今も会社に感謝しています。

本のジャンルは年代で変遷していますね、少年時代は冒険もの、動物記等で夢を馳せ、学生時代は文学、思想の本で些か社会批判家となり、会社に勤めてからは仕事関係の専門書などで追いまわられました。やはり思想は大切です。興味もありましたので、歴史、軍事（戦史・戦術）、民俗学、地誌、宗教の本にと手を出してきました。現在はその延長線上にいる感じです。

私の81年間の本との交わり 池田信子（あすなろ文庫）

私は七人姉妹の五女。また女の子…。本家も父も命名放棄で、任された母は栃高女先輩の吉屋信子氏のお名前を頂戴し、信子と名付けたそうです。五女の私は幸か不幸か家の中でも外でも目につかない位置と性格。これは今にして思えば「本を読む」には真に都合がよかったのかもしれませんが。

しかしその頃本というものは母が独りで楽しむ世界で、子供の私は西の太平山が赤く染まるまで近所の子供達と石けり、靴かくし、段々とび、と遊び呆ける毎日。友達がそれぞれ家に呼びこまれ誰もいなくなると勝手口の木戸をくぐり、台所口から「ねえや」のそばをすりぬけて西日の残る勉強室（姉達と一緒にの）にもぐりこんだものです。

やがてこんな田舎の町の上空にも B29 が飛ぶようになった或る日、学校から帰るとその勉強室に布ばりの文学全集が山のように積まれていたのです。母の実家からの本の疎開です。私にとっては今までに知らない宝の山です。恐る恐る一冊とりあげたのがたまたま泉鏡花。悪いことをするような、恥ずかしいような気持ちにおそわれながら魅きこまれていきました。また、上京した医専の姉が持ち込んだ「チボ一家の人々」、「魅せられたる魂」、神谷美恵子さんの「小島の春」。また、京都三高生の「郷愁記」への憧れ。それは哲学科へ。しかし身の丈に合った御茶ノ水女子大に落ち着いてしまいました。

さて現在の「子供の本」との付き合いは、夫と、彼の開いた「文庫」が始まりです。私も母と同じに、子供に「本」を読んでやることを知らなかったのですが、或る日彼が3歳の娘に「青い目のこねこ」を読んでいるのを聞いて、なんて楽しいんでしょうと思ったことを覚えています。



おしらせ

◆ 9月28日（土） 川端秀明さん講演会

（仮題）としょかんからはじまる

—東北大震災被災地に作ったちいさな図書館—

講師：川端秀明さん

一般社団法人みんなのとしょかん 代表理事

<http://www.mintosho.org/>

日時：2013年9月28日（土）

午後（時刻未定）

場所：小平市中央図書館3階視聴覚室

◆ 友の会の「ブログ」ができました！

小平図書館友の会のブログをつくりました
会の活動報告やイベント案内などをタイムリーに
掲載していきます どうぞご覧ください

<http://yamaoji.cocolog-nifty.com/kltomonokai/>

※ kl（ケー・エル）は kodaira library の略です



携帯電話やスマートフォンからも見られます

右のQRコードをご利用ください



友の会に入会しませんか？

小平図書館友の会は、利用者の交流、図書館への協力・提案などを目指して利用者がつくった団体です。1998年発足。会員数約150名。年1回のチャリティ古本市をはじめ、講演会・文学散歩・図書館見学・読書サークル・朗読サークルなど活発に活動しています。年会費：大人1000円（大学生・高校生500円、中学生・小学生300円）。ご参加、お待ちしております。ご連絡、ご質問は会報表紙、HP・ブログをご覧ください。

特別企画 小平図書館友の会 15年のあゆみ (略年表)

年次	年	会のあゆみ	会の活動	イベント
1	1998年	10.4 設立総会 設立時会員 67名	11.15 会報創刊号発行 12.11 小平中央図書館見学・懇親会	10.4 記念講演 (本間浩氏)
	1999年		5.15 会報2号発行 (以後 年2回発行) 交流紙1号発行 9.24 国会図書館見学	2.23 講演会 (蛭田廣一氏) 5.30 第1回チャリティ古本市 7.21 講演会 (名取俊明氏) 10.3 記念講演 (西村弘氏) 12.3 会員交流会
2		10.3 第2回総会 会員 74名	12.17 友の会ホームページ開設	12.3 会員交流会
	2000年		1.23 小平喜平図書館見学・懇親会	2.27 講演会 (蛭田廣一氏) 3.26 歴史散策 (庄司徳治氏) 5.28 第2回チャリティ古本市 6.24 会員交流会
3		10.1 第3回総会 会員 118名	交流紙4号から手配り開始 12.7 図書館条例勉強会開始	10.1 記念講演 (山口源治郎氏) 10.22 講演会 (亀田邦子氏)
	2001年	1.9 大沼図書館開館	1.18 障がい者サービス学習会発足 3.7 国際子ども図書館見学 6.22 図書館について学ぶ会発足 9.27 障がい者サービス交流会発足	1.20 新年交流会 5.20 第3回チャリティ古本市 6.28 講演会 (山内薫氏) 8.21 ティーンズ向けイベント (笠原倫氏)
			交流紙5号から定期刊行化 (毎月発行)	
		10.14 第4回総会 会員 136名	11.15 会報臨時号「市民から見た小平 市立図書館のあゆみ—第一館開館まで」	10.14 記念講演 (蛭田廣一氏) 12.1 会員交流会
4	2002年		7.7 小平津田図書館見学	5.25~26 第4回チャリティ古本市 6.22 講演会 (糸賀雅児氏) 8.24 会員交流会
5		10.6 第5回総会 会員 134名		
	2003年		1.27 さいたま市浦和東図書館見学 1.29 市立図書館職員との懇談会	1.11 新年交流会 4.6 小平霊園文学散歩 (松永軍治氏) 5.24~25 第5回チャリティ古本市 7.12 講演会 (和田あき子氏)
6		10.4 第6回総会 会員 121名	10.15 嘉悦大学図書館見学	12.6 会員交流会
	2004年	3. NPO法人 小平市民活動ネットワーク に団体会員として入会 9.14 元気村小川東入口 ロビーに 図書館友の会 書棚設置	4. 五周年記念誌発行 8.20 山中湖情報創造館見学	2.28 講演会 (下澤勝井氏) 3.13 吉川英治記念館文学散歩 5.15~16 第6回チャリティ古本市 8.7 会員交流会 9.18 講演会 (近藤富枝氏)
		10.2 第7回総会 会員 138名	11.1 大田区立大田図書館・ 蒲田駅前図書館見学	11.28 田端文士村文学散歩
7	2005年	9. 要望書「子ども読書 活動推進計画」への要望 提出 (小平市子ども文庫 連絡協議会との共同)	1.19 声に出して本を読む会発足 6.4 目黒区立八雲図書館見学 目黒図書館友の会と交流会 7.17 白梅NPOセミナー 市内市民活動団体紹介ブース参加 7.30 国際子ども図書館見学	1.29 新年交流会 5.21~22 第7回チャリティ古本市 8.6 会員交流会
8		10.2 第8回総会 会員 132名		11.5 ビデオ上映会 杉原千畝「命のビザ」(本間浩氏解説)
	2006年	5.8 花小金井図書館 改築オープン (記念式典に参加)	1.25 浦安図書館友の会と交流会 7.7 YAを楽しむ会発足	1.21 新年交流会 5.20~21 第8回チャリティ古本市 6.11 講演会 (浜島正二氏) 7.29 会員交流会

この秋 15周年をむかえる「友の会のあゆみ」ダイジェスト版です
 ただいま詳細年表作成中 ご期待ください

年次	年	会のあゆみ	会の活動	イベント
9		10.1 第9回総会 会員 133名	10.22 NPO フェスタ in 元気村 小川東 2006 参加 (ミニ古本市)	11.19 講演会 (渡部芳紀氏)
	2007年		1.19 NPO 法人小平市民活動 ネットワーク新年会参加 1. 図書館協議会委員公募 友の会会員から3人応募、就任	1.21 新年交流会 4.8 大森文士村文学散歩 5.19~20 第9回チャリティ古本市 6.30 講演会 (渡部芳紀氏) 8.4 会員交流会
10		10.14 第10回総会 会員 138名	11.16 市川市立中央図書館見学 (図書館について学ぶ会主催)	
	2008年		2.13 第1回図書館利用者懇談会 (友の会 14人参加)	1.20 新年交流会 4.12 三鷹界隈文学散歩 5.24~25 第10回チャリティ古本市 8.2 会員交流会 9.6 講演会 (吉澤靖氏)
11		10.5 第11回総会 会員 154名	10.5 十周年記念誌発行	
	2009年		5.29 千代田区立千代田図書館見学 7.27 府中市立中央図書館見学	1.18 新年交流会 4.11~12 第11回チャリティ古本市 5.17 講演会 (齊藤誠一氏) 6.13 深川芭蕉コース文学散歩 8.4 会員交流会
12		10.4 第12回総会 会員 157名	10.18 第1回読書サークル・小平発足 11.15 会報 23号発行 (B5版をこの号からA4版に)	
	2010年		4.24~25 三多摩自治体学校分科会 「社会教育」の部に参加 12.1 新宿区立角筈図書館見学	1.17 新年交流会 3.21~22 第12回チャリティ古本市 6.5 本郷・東大界隈文学散歩 7.17 講演会 (齋藤淑子氏) 8.7 会員交流会 9.12 講演会 (松村恒氏)
13		10.3 第13回総会 会員 149名	2.6 虹ヶ丘自治会主催 「地域お楽しみ会—朗読と落語を聞こう」 朗読参加	1.15 新年交流会 5.22 講演会 (芳賀啓氏) 7.9~10 第13回チャリティ古本市 7.28 会員交流会 8.6 講演会 (齋藤淑子氏) 11.6 野川周辺文学散歩 (芳賀啓氏)
	2011年		10.13~14 全国図書館大会多摩大会の 展示会に参加	
14		10.2 第14回総会 会員 149名	5.24 あきる野市図書館見学 5.25 YAを楽しむ会 『大人が読んでも面白いYAの本 その1』 <small>だれ</small> <small>ヤングアダルトブックス</small> (A5版 32頁) 発行 7.9 武蔵野プレイス見学	1.14 新年交流会 3.24~25 第14回チャリティ古本市 6.9 講演会 (川本三郎氏) 6.24 実篤記念館ほか文学散歩 7.27 会員交流会 10.14 講演会 (蛭田廣一氏)
	2012年		11.5 小平花小金井図書館見学 11.13 会報 29号発行	
15		10.14 第15回総会 会員 152名	3.13 第13回障がい者サービス交流会 3.17 第18回読書サークル・小平 4.6 声に出して本を読む会発表会 4.26 YAを楽しむ会	1.25 新年交流会 3.30~31 第15回チャリティ古本市 4.13 林芙美子記念館ほか文学散歩 5.18 講演会 (今尾恵介氏)
	2013年			

15 回目の古本市を終えて

友の会創立いらい毎年実施されているチャリティ古本市。今年は集本・準備3日間(3/27~29)、販売2日間(3/30・31)でおこなわれました。

場所は例年どおり小平中央公民館ギャラリー。

天気はあまりよくなかったのですが、例年より早く咲いた桜がちょうど満開。たくさんの寄付本が集まり売上も約7,600冊、30万円を超えました。

- ・集本冊数 約 18,500 冊
(うち前年の保管本約 6,500 冊)
- ・売上冊数 約 7,600 冊
- ・売上金額 301,400 円
- ・入場者数 3/30 (土) 約 660 人
3/31 (日) 約 350 人
- ・経費 約 68,500 円(スタッフ飲食・備品購入・ボランティア謝礼・運搬費用他)

(2013. 4月8日時点)

毎回の収益は小平図書館へ物品寄贈されます。
震災後は被災地図書館の復興にも一部を充てています。

今年も販売初日には長い列ができて混雑しましたが、昼頃には波が引き、ゆっくり本を選ぶお客様で会場はいい雰囲気でした。全集などの特価本もよく売れました。

期間前の例外的な集本、保管本の搬入、会場準備、寄付本受付、そして販売、後片付けと、40人近い会員・ボランティアがこの古本市に携わりました。年に一度の“おまつり”のような大イベントです。みなさん大好きな本に囲まれて楽しい日々を過ごされたことでしょう。



年々さまざまな工夫が重ねられ、運営もスムーズにおこなわれていますが、反省会ではいくつか改善したいこともあげられました。開催趣旨にある「市民から読み終えた本を寄付していただき、再び活用していただく」という原点を忘れず、再び楽しい“おまつり”ができる日を、今から指折り数えて待っています。(入山)

文学散歩 林芙美子記念館



2013/4/13(土) 林芙美子記念館前で

当日の参加者は20名ほど。文学散歩には初めて参加したが、4月6日にルネ小平であった「声に出して本を読む会」の発表を聴きにきて下さった方から声をかけていただきすぐに打ち解けた。

「林芙美子記念館」となっている芙美子の家は、中井駅近くの閑静な住宅街にあり、南に庭を北に小さなお山をもっていて花と緑が70年を経た趣のある家を守っている。気に入った家を建て、夫と母と養子にした息子との幸せな家庭でも芙美子は仕事に追われ、この家に10年しか住まないで40代半ばで亡くなったのは可哀そうだった。

小柄な芙美子が戦前に外国を下駄で元気に歩き廻ったり、戦中は文学者として従軍して記事を書いたり短い命を精いっぱい生きたのだと思うと愛おしい。

午後は上井草の「いわさきちひろ美術館」へ。ちひろの絵には子どもと花がなんとも愛らしく描かれ長く人々の心をとらえている。ちひろさんは大層花作りの好きな人だったそうで、中庭には当時の花をなるべく残す工夫がされている。

絵を描くのに疲れると庭仕事をして、子どもの遊ぶ様子を見ることであの優しい絵が生まれたのだろう。ここで私は初めて中国の絵本を見て、こんな素晴らしい絵本を書いた中国の作家たちに敬意をもった。幸せな一日だった。(富岡いづみ)

林芙美子記念館



学習会報告

障がい者サービス学習会

第13回障がい者サービス交流会報告

— 3月13日 中央図書館にて 20名参加 —

図書館友の会では障がい者の声を聞き図書館に伝えていく活動を設立当初から持ち、サービスの向上を望んできました。特に視覚障がい者から要望が高かった対面朗読サービスについて、障がい者が申し込んでから実施に至るまでの時間と手間の短縮の解決法を提言してきました。昨年度、一般市民から音訳のための朗読経験者を募り、研修を重ねていよいよ図書館音訳ボランティアとして活動をはじめます。以前は図書館の資料に限った音訳でしたが、個人持ちの資料も持ち込めるようになりました。このほかデイジー図書*の編集にもボランティアが関わりデイジー図書の増加が期待されます。また点訳図書の目録や録音図書の目録などにもより利用しやすい工夫がみられます。これらを紹介した「ハンディキャップサービスごあんない」改訂版はまだ試みの段階ではありますがSPコードをつけて音声で聞くことができるようにするなどの工夫がされつつあります。このように一昨年から今年にかけて障がい者サービスの充実が図られてきていることはうれしい限りです。

一方課題もまだまだ残ります。その一つとして情報の徹底があります。素晴らしいサービスを企画してもその情報が当事者に伝わらなければ絵に描いた餅です。あらゆる手段、あらゆる機会を捉えてPRする必要があります。組織やグループに属していない障がい者も多く、どこで、どのようなサービスが受けられるのか隅々まで行きわたるきめの細かい情報提供が望まれます。また障がい者の多くは移動困難者でもあります。現在対面朗読室を備えているのは市内8館のうち中央図書館と大沼図書館の2館のみです。「障がい者サービスの充実」とは内容のみならず「利用しやすい環境を整備する」ことでもあります。誰もが身近な図書館でサービスを受けられるように優先的に考えなければならない課題だと思います。

* デイジー図書…活字による読書が困難な方のために作られたデジタル録音図書 (CD)

声に出して本を読む会「第7回・ことばの玉手箱」

— 盛況裡の「ことばのしらべ」と課題 —



4月6日(土)午後、ルネこだいら・レセプションホールで開催した「第7回ことばの玉手箱・ことばのしらべ」は、会員各位のご協力を得て、盛況裡に終わることができました。あいにく悪天候の第1日目、遠方(福島県や神奈川県・茅ヶ崎市、他)からや、障害をお持ちの方のご来聴は、大変だったと思います。

2005年1月結成以来、8年目の活動に入った私たちの活動は、単なる朗読形式の発表から、演出家をはじめ専門分野の方々のご指導、ご協力を得て今日に至り、メンバーは10名を超え、発表の工夫も求められてきました。この歳月を経て、今回も一生懸命取り組みましたが、「発表のテーマ」を、どう表現しえたか、きびしい総括で、次回を目指さねばならないと覚悟しています。

今回の「ことばのしらべ」は、第一部「プロローグ」で、ピアノの「単音」に始まり「声⇒響き⇒歌⇒ことば⇒日本語⇒くらし⇒歴史」が、第二部の、詩、小説へと、様ざまに「ことば」の韻や意味が語られる展開で、発表時間の長さのわりには、ちょっと欲深い内容でした。演劇的工夫や、照明・ピアノでの、立体的表現については、アンケートの多くで「よかった」のご評価とともに、「よくわからない」のご意見は、演者の基本的な課題を指摘されたのであり、その弱点をフォローする工夫が、結果的に演者の弱点をより鮮明にされた、と受け止めています。

こうした経過を踏まえ、さらに向上を目指すか、いずれにしても、「声に出して本を読む」ことが「ことばのしらべ」に通ずるものとして、会員の皆さんに支えられ、今後の活動を期したいと考えます。(雑崎)

Y A を楽しむ会

Y Aとはヤングアダルトブックスの略です。

月に1回金曜日の午前中、2冊の本を読んで来て「元気村おがわ東」に集まり、感想を話し合います。堅苦しくなく、気楽に楽しめる会を目指しつつ友情を育てています。現在参加者は10名前後で、最近男性も入会して賑やかになりました。

2012.11月から2013.4月までに取り上げた本

- 11月「顔のない男」イサベル・ホーランド 富山房
「ユタとふしぎな仲間たち」三浦哲郎
新潮少年文庫
- 12月「クリスマスの思い出」トルーマン・カポーティ
文芸春秋
「雨上がりのメデジン」
アルフレッド・ゴメス＝セルダ 鈴木出版
- 1月「のっぽのサラ」「草原のサラ」
パトリシア・マクラクラン 徳間書房
- 2月「シフト」ジェニファー・ブラッドベリ 福音館
「小さな魚」エリック・C・ホガード 富山房

読書サークル・小平

隔月に1度、第3日曜日の午後開いています。

(変則もあり)長く大学図書館に勤められた大森輝久さん(会員)がリードして進みます。毎回7~8人が定着してきました。課題本にとらわれず話があちこちに飛びますが包容力、調整力にすぐれた大森さんのかじ取りでなごやかな雰囲気です。たとえ課題本を読んでこなくても楽しめるのがうれしい読書サークル・小平です。

2012.11月から2013.3月までの課題本

- 11月「病気と日本文学」福田和也 洋泉社新書
- 1月「日本の転機—米中の狭間でどう生き残るのか」
ロナルド・ドーア ちくま新書
- 3月「こんなに変わった歴史教科書」
山本博文ほか著 新潮文庫

図書館について学ぶ会

いろいろな情報をもとに図書館について学びます。市内や近隣の図書館見学にも出かけます。学びながら利用者の声を図書館に届ける役割もしています。今後は「居場所としての図書館」をテーマに勉強していく予定です。

図書館協議会報告・まとめ

図書館協議会委員 伊藤規子

図書協の委員となって3期6年が過ぎました。公募委員なので3期まででおしまいです。貴重な経験をさせていただきました。

この間の大きな変化と言えば、仲町公民館・図書館の改築と昨年度からの障がい者サービスの進展ではないかと思っています。

仲町公民館・図書館は、単なる合築ではなく、2つの施設機能が相乗的に作用しあうというコンセプトです。施設・備品の有効利用だけでなく、合同企画を立てたり情報を共有したりといったことが期待されます。「そこにいけばなにか楽しいこと、役に立つことに出会える」ようなワクワクできる施設ができると良いですね。

障がい者サービスは、とくに視覚障がいのある方たちからの10数年来の要望がかなえられつつあります。高齢社会を迎える市民全体にとっても、いっそう充実したサービスとなっていくことを願っています。

はじめて委員となったときは、あれこれ思いもあり、それなりに意気込んで出席してきましたが、やはり6年たつと、あまり変わり映えのしない意見を言い続けることになります。図書館とのかかわりは、子ども文庫の活動を含めると30年以上。つい、当然と思っていたことも、新しい目で見れば違う意見が出てきて当たり前。専門家ではないので、不断に専門知識を積み重ねているというわけではなく、そういう意味でもちょうど良い切り替え時と思っています。新年度の委員に期待しています。

今号から本文の字体(フォント)を変えて読みやすくしました。いかがでしょうか。みなさまのご意見、ご感想をお待ちします。